使用上の基準における関与的成分と非関与的成分

－ ナル型敬語とレル型敬語の混用実態を対象として －

李成圭* · 와다 고지(和田康二)**
leesk@inha.ac.kr, wadakoji@hanmail.net

Contents

Ⅰ. はじめに
Ⅱ. 「お出かけになる」と「出かけられる」の使用実態とその使用上の基準
Ⅲ. 「お登りになる」と「登られる」の使用実態とその使用上の基準
Ⅳ. 「お帰りになる」と「帰られる」の使用実態とその使用上の基準
Ⅴ. おわりに

Abstract

本稿では日本聖書協会刊行による新約聖書(新共同訳)の4福音書を言語資料として、ナル型敬語とレル型敬語が混用されている例の中から、「お出かけになる・出かけられる」「お登りになる・登られる」「お帰りになる・帰られる」を対象に、これら尊敬語形式の使用実態の具体的な検討により、ナル型敬語とレル型敬語の使い分けに関わる使用上の基準について再度吟味した。その結果、該当尊敬語形式の決定に直接関わる関与的な成分と使用上の基準として見なされない非関与的な成分を区別した。

本稿で考察した内容をまとめると、以下の通りである。

[1] 「出かける」の尊敬語形式「お出かけになる」と「出かけられる」両者の使用上の基準をその関与の仕方から観察すると次の通りである。(1)と(2)では<神的イエス>と見なされる<イエス>の行為に対して「お出かけになる」が使われているが、(1)と(2)でナル型敬語を選択する上で関与する要因には多少の違いがある。(1)では改まり度の違いよりは<イエス>を<神的イエス>として表現するための敬意主体の把握の仕方に重点が置かれているのに対し、(2)では話体的要因が該当尊敬語形式を選択する上で直接的に関与している。一方、(1)では「イエスが[そこから]お出かけになると」のように動作の起点を表す成分が、(2)では「イエスは[～の村に]お出かけになった」のように動作の到達点を表す成分が明示されているが、これらの成分は尊敬語形式を選択する上で直接関与していない。

[2] 「登る」の尊敬語の形式には「お登りになる」と「登られる」があるが、両者の使用上の基準をその関与の仕方から観察すると次の通りである。(4)では<イエス>を<神>と同格と見なしており<神的イエス>という行為主体の特性と地の文という文体的特徴そして荘重荘重さ

＊ 仁荷大学校 文科大学 東洋語文学部 日語日本学専攻 教授 日本語学.
** 仁荷大学校 大学院 博士課程 日語日本学専攻.

교보문고 KYOBO Book Centre

という話体的要因が使用上の基準として関与し<イエス>の行為に対してナル型｢お登りになる｣が使われている。これに対し(5)(6)(7)(8)では<人間イエス>という行為主体の特性と当該行為が個別的で具体的な事件という行為内容のカテゴリー的特徴、そして話体的要因が使用上の基準として関与し、<イエス>の行為に対してレル型敬語｢登られる｣が使われている。一方、(4)の｢イエスは～[山に]お登りになった｣と(5)(6)(7)(8)の｢イエスは～、[山に]登られた｣では｢山に｣のように移動の場所(到達点)を表す成分が明示されているが、前者ではナル型敬語が後者ではレル型敬語が使われているという点でこれらの成分は使用上の基準において非関与的であると考えられる。同様に(4)の｢イエスは[祈るために]ひとり山にお登りになった｣と(8)の｢イエスは、～[祈るために]山に登られた｣では｢祈るために｣という動作の目的を表す成分が使われているが、これも尊敬語形式の使用上の基準において非関与的なものと見なされる。

[3] ｢帰る｣の尊敬語形式には｢お帰りになる｣と｢帰られる｣があるが、両者の使用上の基準をその関与の仕方から観察すると次の通りである。(9)と(10)では<人間イエス>という敬意主体の特性と地の文という文体的特徴と改まり度が高いという話体的要因が、又、(11)では<神的イエス>という敬意主体の特性と地の文という文体的特徴と改まり度が高いという話体的要因が認められ、これらの使用上の基準がナル型敬語を選択する上で直接関与している。(12)では<人間イエス>という行為主体の特性と地の文という文体的特徴そして話体的要因が使用上の基準として働き、レル型敬語が使われている。一方、移動の到達点に注目すると、(9)(10)の｢故郷｣のように規模が大きく抽象度の高いものに対してはナル型敬語を、これに対し(12)の｢家｣のように到達点が特定化され具体的なものに対してはレル型敬語を区別して適用したという解釈も成り立つ。このような観点で見ると、(9)の｢故郷｣と(10)の｢家｣は尊敬語形式を選択する上での関与的な成分として見なされる。(11)の｢イエスは～、[ヨルダン川から]お帰りになった｣のように移動の起点が、(13)の｢イエスは～[ガリラヤに]帰られた｣のように移動の到達点が明示されている場合があるが、これは尊敬語形式の選択において直接関与していない。同様に(11)の｢聖霊に満ちて｣と(13)の｢霊の力に満ちて｣のように移動の状況を表す修飾成分が使われた場合があるが、これもやはりナル型敬語とレル型敬語の選択においては非関与的である。

Key Words : ナル型敬語、レル型敬語、使用上の基準、関与的な成分、非関与的な成分
(Naru-type honorifics, Reru-type honorifics, usage norms, Participative use, non-participative use)

Ⅰ. はじめに

本稿では日本聖書協会刊行による新約聖書(新共同訳)の4福音書を言語資料として、ナル型敬語とレル型敬語が混用されている例の中から、「お出かけになる·

교보문고 KYOBO Book Centre

出かけられる」「お登りになる・登られる」「お帰りになる・帰られる」を対象として、これら尊敬語形式の使い分けにおける関与的成分と非関与的成分を具体的に検討することにより、李成圭(2011a)で「お帰しになる・帰される」「お教えになる・教えられる」「お与えになる・与えられる」「お命じになる・命じられる」「お造りになる・造られる」「お示しになる・示される」を対象に行った使用上の基準と、李成圭(2011b)で「お受けになる・受けられる」「お乗りになる・乗られる」「お座りになる・座られる」を対象に行った使用上の基準が有効であるかを考察する。

具体的な考察内容を提示すると次の通りである。ナル型敬語とレル型敬語が共に成立可能な動詞において、1)<神的イエス>であるか<人間イエス>であるかという敬意主体の区別、2)個別的かつ具体的な事件であるか或いは包括的かつ抽象度の高い事項であるかという敬意内容のカテゴリー的違い、3)地の文であるか対話文であるかという文体的な違い、4)荘重さ(改まり度)という話体的要因は、どの特定尊敬語形式を選択するかに直接関与するという点で使用上の基準において関与的な成分であるという点を明らかにする。これに対し「イエスが[そこから]お出かけになると」・「イエスは、[ヨルダン川から]お帰りになった」のように移動の起点を表す成分と、「イエスは、[~の村に]お出かけになった」・「イエスは~[山に]お登りになった」・「イエスは~、[山に]登られた」・「イエスは[ガリラヤに]帰られた」のように移動の場所(到達点)を表す成分は、該当の尊敬語形式を選択するにあたり関与していないが、「故郷」のように規模が大きく、抽象度の高い事項を表し、また、そのような行為内容のカテゴリー的な違いが、「家」のように到達点が特定化された具体的な事件と対比される場合には、該当の尊敬語形式を選択するにあたり関与的な成分となるという点を確認する。併せて「イエスは[祈るために]ひとり山にお登りになった」や「イエスは~、[祈るために]山に登られた」のように動作の目的を表す成分と、「聖霊に満ちて」や「霊の力に満ちて」のように移動の状況を表す修飾成分も、ナル型敬語とレル型敬語の選択においては非関与的であるという点を主張する。

교보문고 KYOBO Book Centre

Ⅱ. 「お出かけになる」と「出かけられる」の使用実態とその使用上の基準

「出かける」の尊敬語形式には、ナル型敬語の「お出かけになる」と、レル型敬語の「出かけられる」がある。

〈表1〉「お出かけになる」と「出かけられる」の使用実態

	お出かけになる	出かけられる
マタイによる福音書	**イエス**がそこから**お出かけになると**(1)[1] [マタイによる福音書 / 9章 27節]	
マルコによる福音書	**イエス**は~フィリポ・カイサリア地方の方々の村に**お出かけになった**(2) [マルコによる福音書 / 8章 27節]	
ルカによる福音書		**イエス**は一緒に**出かけられた**(3) [ルカによる福音書 / 7章 6節]
ヨハネによる福音書		

<表1>のように同一の<イエス>の行為について[マタイによる福音書][マルコによる福音書]ではナル型敬語だけが、[ルカによる福音書]ではレル型敬語だけが使われている。では、「お出かけになる」と「出かけられる」が如何なる使用上の基準によって使い分けられているのか検討しよう。

先ず「お出かけになる」が使用された例から探ってみよう。

(1) **イエス**がそこからお出かけになると、二人の盲人が叫んで、「ダビデの子よ、わたしたちを憐れんでください」と言いながらついて来た。(マタイによる福音書 / 9章 27節)

(2) **イエス**は、弟子たちとフィリポ・カイサリア地方の方々の村にお出かけになった。その途中、弟子たちに、「人々は、わたしのことを何者だと言っているか」と言われた。(マルコによる福音書 / 8章 27節)

1) (1)~(13)は本稿で考察している例文の番号を指す。

교보문고 KYOBO Book Centre

(1)は<イエス>が奇跡を行い、その噂が村全体に広まって、<イエス>がそこを去ることについて地の文で｢お出かけになる｣が使われたものであるが、神の絶対的な権能と考えられる奇跡を行った<イエス>を<神>と同格と見なし、当該行為についてナル型敬語が選択的に使用されたものである。一方、(1)では｢お出かけになると｣のように既定条件を表す｢～と｣を伴っているという点から、前後2文を連続的な動作として把握しており、緊張感や改まり度といった話体的な要因は相対的に減少する。従って、(1)では改まり度の違いよりは<イエス>を<神的イエス>として表現するための敬意主体の把握の仕方に重点が置かれていると言えよう。(2)は<イエス>が盲人を癒した後、弟子たちとフィリポ・カイサリア地方の村々に出かけることを表す地の文で｢お出かけになる｣が使われている。｢フィリポ・カイサリア地方の方々の村｣に出かけるという行為自体は規模が大きく、抽象度が高い事項ではないが、神の絶対的な権能と考えられる奇跡を行った<神的イエス>に対し、ナル型敬語を選択することによって敬意度を高めている。又、ナル型敬語が｢お出かけになった｣のように文末終止に使われた(2)では荘重な感じを伴っているが、これは話体的な要因が尊敬語形式の選択に関与しているもので、後続文で<イエス>の発話行為に対して改まり度の低いレル型敬語の｢言われる｣が使われていることと対比される。李成圭(2011b)で指摘したように、同一動詞に複数の尊敬語形式が共存する場合には、敬意主体の区別・行為内容のカテゴリー的な違い・文体的な違い・話体的な違いによる多種多様な要因が該当の尊敬語形式を決定する上で個別的、多重的、相互複合的に作用しており、その関与の仕方は必ずしも等価的、若しくは均等ではない。同一のナル型敬語｢お出かけになる｣が使われている(1)と(2)は、敬意主体として<イエス>を高めており、両者共に地の文であるという共通点が認められるが、(2)の場合には更に改まり度の違いという話体的な要因が該当の尊敬語形式の選択に関与していると解される。また、(1)では｢イエスが[そこから]お出かけになると｣のように動作の起点を表す成分が、(2)では｢イエスは~[フィリポ・カイサリア地方の方々の村に]お出かけになった｣のように動作の到達点を表す成分が明示されているが、これらの成分は尊敬語形式を選択する上で直接関与してはいない。

次に｢出かけられる｣が使用された例を検討しよう。

교보문고 KYOBO Book Centre

(3)　そこで、イエスは一緒に出かけられた。ところが、その家からほど遠からぬ所まで来たとき、百人隊長は友達を使いにやって言わせた。「主よ、御足労には及びません。わたしはあなたを自分の屋根の下にお迎えできるような者ではありません。(ルカによる福音書 / 7章 6節)

(3)は<イエス>が、百人隊長が使いにやった長老らと共に出かけることについて地の文でレル型敬語「出かけられる」が使われたもので、当該行為が個別的かつ具体的な事件として把握されていることが分かる。ここでは「イエスは一緒に出かけられた。ところが、~百人隊長は友達を使いにやって言わせた」のように「出かけられる」が文末終止形態で使われており、後続文に接続詞が使われているが、このときの「ところが」は対比や逆接を表すのではなく、話題の転換を表しており、前後2文を継起的な動作として把握していると言えよう。

以上、検討した「お出かけになる」と「出かけられる」の使用上の基準をその関与の仕方から観察すると次の通りである。(1)[マタイによる福音書]と(2)[マルコによる福音書]では<神的イエス>と見なした<イエス>の行為に対して「お出かけになる」が使用されているが、両福音書でナル型敬語の選択に関与する要因には多少の違いがある。両福音書は<神的イエス>という敬意主体の特性、個別的かつ具体的な事件といった行為内容のカテゴリー的な特徴、地の文という文体的特徴においては共通点が認められる。(1)の[マタイによる福音書]では「お出かけになると」のように既定条件を表す「~と」を伴っているという点で前後2文を連続的な動作として把握しており、緊張感や改まり度といった話体的な要因は相対的に減少し、従って、ここでは改まり度の違いよりは<イエス>を<神的イエス>として表現するための敬意主体の把握の仕方に重点が置かれている。これに対して(2)の[マルコによる福音書]では、ナル型敬語を「お出かけになった」のように文末終止に用いることにより、改まり度が高いという話体的要因が該当尊敬語形式の選択に直接的に関与している。また、(1)では「イエスが[そこから]お出かけになると」のように動作の起点を表す成分が、(2)では「イエスは[~の村に]お出かけになった」のように動作の到達点を表す成分が明示されているが、これらの成分は尊敬語形式の選択において直接関与していない。一方、(3)の[ルカによる福

교보문고 KYOBO Book Centre

音書]では<人間イエス>という敬意主体の特性や個別的かつ具体的な事件という行為内容のカテゴリー的特徴、そして地の文という文体的特徴が使用上の基準として作用している。又、「出かけられる」が「出かけられた」のように文末終止形態で使われており、後続文に接続詞が使われているが、このときの「ところが」は話題転換を表しており、前後2文が継起的な動作であることを意味しているために改まり度が低いと言われる話体的要因も使用上の基準として関与し、結果的にレル型敬語「出かけられる」が選択されたものと解される。

Ⅲ. 「お登りになる」と「登られる」の使用実態とその使用上の基準

「登る」の尊敬語形式にはナル型敬語「お登りになる」とレル型敬語「登られる」がある。

〈表2〉「お登りになる」と「登られる」の使用実態

	お登りになる	登られる
マタイによる福音書	**イエス**は祈るためにひとり山に**お登りになった**(4) [マタイによる福音書 / 14章 23節]	**イエス**は、山に**登られた**(5) [マタイによる福音書 / 5章 1節] **イエス**は、高い山に**登られた**(6) [マタイによる福音書 / 17章 1節]
マルコによる福音書		**イエス**は、高い山に**登られた**(7) [マルコによる福音書 / 9章 2節]
ルカによる福音書		**イエス**は、祈るために山に**登られた**(8) [ルカによる福音書 / 9章 28節]
ヨハネによる福音書		**イエス**はエルサレムに**上られた** [ヨハネによる福音書 / 5章 1節]

<表2>のように4福音書で<イエス>の行為に対してナル型敬語「お登りになる」とレル型敬語「登られる(上られる)」が混用されているが、[マタイによる福音書]では「お登りになる」と「登られる」が共に使われているのに対し、[マルコによる福音

교보문고 KYOBO Book Centre

書]と[ルカによる福音書]では「登られる」だけが使われており、[ヨハネによる福音書]では<イエス>がエルサレムに上ることについて「上られる[2)]」が使われている。

先ず、移動の場所(到達点)に注目すると、「山に{お登りになる・登られる}」のように「山に」に対してナル型敬語とレル型敬語が共に使われており、尊敬語形式の選択において移動の場所による違いは認められない。一方、「祈るために」のように目的を表す場合、[マタイによる福音書]ではナル型敬語が、[ルカによる福音書]ではレル型敬語が使われており、一見、福音書間の異同を見せている。

では、「お登りになる」と「登られる」が如何なる使用上の基準によって使い分けられているのか具体的に検討する。

先ず、「お登りになる」が使用された例から探ってみよう。

(4) 群衆を解散させてから、祈るためにひとり山にお登りになった。夕方になっても、ただひとりそこにおられた。(マタイによる福音書 / 14章 23節)

(4)は<イエス>が5,000人に食事を与えて帰らせた後、一人で山に登ったことを表す地の文で「お登りになる」が使われている。これについては、神の絶対的権能と考えられる奇跡を行った<イエス>の行為を<神>のそれと同格と見なし、敬意度の高いナル型敬語が使われたものと一応解され得る。また、(4)ではナル型敬語が「お登りになった」のように文末終止形態で使われており、文全体に荘重さが感じられる。従って、(4)では<イエス>を<神>と同格と見なしているという敬意主体の特性と、荘重さという話体的要因がナル型敬語の選択に関与していると理解される。また、後続文では<イエス>の存在に対して「いる」のレル型敬語「おられる」が使われているが、4福音書では「いる」の敬語に「おられる」だけが使われているため、尊敬語の使用において前後2文の間に積極的な差は認められない。

次に「登られる」が使用された例を検討しよう。

2) その後、ユダヤ人の祭りがあったので、イエスはエルサレムに上られた。(ヨハネによる福音書 / 5章 1節)

교보문고 KYOBO Book Centre

(5) イエスはこの群衆を見て、山に登られた。腰を下ろされると、弟子たちが近くに寄って来た。(マタイによる福音書 / 5章 1節)

(5)では<イエス>が群衆を見て山に登ったことについて「登られる」が使われており、「山に登る」という行為それ自体に変りはないが、同じ福音書で(4)ではナル型敬語が使われていることと対比される。また、後続文で<イエス>に対し「腰を下ろされる」のように同一のレル型敬語が使われているという点から、当該行為が個別的かつ具体的な内容を表しており、荘重さという改まり度も相対的に低く感じられる。このような行為内容におけるカテゴリー的な違いと改まり度の違いを尊敬語形式の選択に反映させ、(5)ではレル型敬語が使われたのである。(4)と(5)では<イエス>という同一の敬意主体に対して尊敬語形式を等差的に適用しており、これは該当動詞において複数の尊敬語形式が成立することに起因する。

(6) 六日の後、**イエス**は、ペトロ、それにヤコブとその兄弟ヨハネだけを連れて、高い山に登られた。(マタイによる福音書 / 17章 1節)
(7) 六日の後、**イエス**は、ただペトロ、ヤコブ、ヨハネだけを連れて、高い山に登られた。イエスの姿が彼らの目の前で変わり、(マルコによる福音書 / 9章 2節)
(8) この話をしてから八日ほどたったとき、**イエス**は、ペトロ、ヨハネ、およびヤコブを連れて、祈るために山に登られた。(ルカによる福音書 / 9章 28節)

(6)と(7)は、<イエス>がペトロ、ヤコブとその兄弟ヨハネを連れて高い山に登ったことを表す地の文で「登られる」が使われているが、当該行為を<イエス>が神々しい姿に変わる前の<人間イエス>として行った個別的かつ具体的な事件と把握して、これに対してレル型敬語を適用したものである。(8)は(6)(7)とほぼ同じ内容を表す地の文であるが、ここでも「登られる」が使われている。(8)で「イエスは、[ペトロ、ヨハネ、およびヤコブを連れて]、[祈るために]山に登られた」の「ペトロ、ヨハネ、およびヤコブを連れて」は[マタイによる福音書]では「ヤコブとその兄弟ヨハネだけを連れて」、[マルコによる福音書]では「ただペトロ、ヤコブ、ヨハネだけを連れて」のように表現されているが、敍述内容における実質的

교보문고 KYOBO Book Centre

な意味の差は認められず、動作の目的を表す[祈るために]はナル型敬語が使用された(4)でも「[祈るために]ひとり山にお登りになった」のように使われているという点から、これもやはり尊敬語形式の選択に直接的に関与していないものと見られる。従って、(6)(7)(8)では<イエス>の行為に対して当該行為を<イエス>が神々しい姿に変貌する以前の<人間イエス>として行った個別的かつ具体的な事件と把握し、レル型敬語「登られる」が使われたものと理解される。尚、(6)(7)(8)ではレル型敬語が「登られた」のように文末終止に使われているが、意味関係上、前後2文が継起的な動作として把握されるために、その分、改まり度は低く感じられる。

以上、検討した「お登りになる」と「登られる」の使用上の基準をその関与の仕方から観察すると次の通りである。(4)の[マタイによる福音書]では<イエス>を<神>と同格に見なしており、<神的イエス>という行為主体の特性と地の文という文体的特徴、そして荘重さという話体的要因が使用上の基準として関与し、<イエス>の行為に対してナル型「お登りになる」が使用されている。これに対し、(5)(6)の[マタイによる福音書]、(7)の[マルコによる福音書]、(8)の[ルカによる福音書]では<人間イエス>という行為主体の特性や当該行為が個別的かつ具体的な事件という行為内容のカテゴリー的特徴、そして「登られた」のように文末終止に使われているが、改まり度が相対的に低いという話体的要因が使用上の基準として作用し、<イエス>の行為に対してレル型敬語「登られる」が使われている。このような使用上の基準が尊敬語形式を選択する上で反映され、(4)ではナル型敬語が、(5)~(8)ではレル型敬語のように敬意度が等差的に適用されたものと解される。一方、(4)の「イエスは~[山に]お登りになった」、(5)の「イエスは~、[山に]登られた」、(6)の「イエスは、~高い[山に]登られた」、(7)の「イエスは、~高い[山に]登られた」、(8)の「イエスは、[山に]登られた」のように「山に」に対してナル型敬語とレル型敬語が共に使われており、尊敬語形式の選択において移動の場所(到達点)による違いは認められず、従って、これらの成分は使用上の基準においては非関与的なものと捉えられる。また、(4)[マタイによる福音書]の「群衆を解散させてから、[祈るために]ひとり山にお登りになった」と、(8)[ルカによる福音書]の「イエスは、ペトロ、ヨハネ、およびヤコブを連れて、[祈るために]山に登ら

교보문고 KYOBO Book Centre

れた」では「祈るために」という動作の目的を表す成分が使われているが、これも尊敬語形式の使用上の基準において非関与的なものと見なされる。

Ⅳ. 「お帰りになる」と「帰られる」の使用実態とその使用上の基準

「帰る」の尊敬語形式にはナル型敬語の「お帰りになる」とレル型敬語の「帰られる」がある。

〈表3〉「お帰りになる」と「帰られる」の使用実態

	お帰**りになる**	帰**られる**
マタイによる福音書	**イエス**は、故郷に**お**帰**りになった**(9) [マタイによる福音書 / 13章 54節]	
マルコによる福音書	**イエス**は、故郷に**お**帰**りになった**(10) [マルコによる福音書 / 6章 1節]	**イエス**が家に帰**られると**(12) [マルコによる福音書 / 3章 20節]
ルカによる福音書	**イエス**は聖霊に満ちて、ヨルダン川から**お**帰**りになった**(11) [ルカによる福音書 / 4章 1節]	**イエス**は“霊”の力に満ちてガリラヤに帰**られた**(13) [ルカによる福音書 / 4章 14節]
ヨハネによる福音書		

<表3>のように[マタイによる福音書]では「お帰りになる」だけが使われているが、[マルコによる福音書][ルカによる福音書]では「お帰りになる」と「帰られる」が混用されており、[ヨハネによる福音書]では「帰る」の尊敬語形式は使われていない。

移動の場所に注目すると、「イエスは、[故郷に]お帰りになった」のように「故郷」に対してはナル型敬語が、「イエスが[家に]帰られると」のように「家」に対してはレル型敬語が使われており、移動の到達点の違いを[マルコによる福音書]では尊敬語形式に差別的に適用しているように見える。また、[ルカによる福音書]では「イエスは~、[ヨルダン川から]お帰りになった」のように移動の起点が明示されている場合にはナル型敬語が、「イエスは~[ガリラヤに]帰られた」のように移

교보문고 KYOBO Book Centre

動の到達点が明示されている場合にはレル型敬語が使用されており、移動に関する成分により尊敬語形式の異同も見られる。

以下、「帰る」の尊敬語形式「お帰りになる」と「帰られる」がこれらの福音書で如何なる使用上の基準によって使い分けられているのかを具体的に検討する。

先ず、「お帰りになる」が使用された例から探ってみよう。

(9) **イエス**はこれらのたとえを語り終えると、そこを去り、(マタイによる福音書 / 13章 53節)故郷にお帰りになった。会堂で教えておられると、人々は驚いて言った。「この人は、このような知恵と奇跡を行う力をどこから得たのだろう。(マタイによる福音書 / 13章 54節)

(10) **イエス**はそこを去って故郷にお帰りになったが、弟子たちも従った。(マルコによる福音書 / 6章 1節)

(11) さて、**イエス**は聖霊に満ちて、ヨルダン川からお帰りになった。そして、荒れ野の中を"霊"によって引き回され、(ルカによる福音書 / 4章 1節)

(9)は<イエス>がたとえを語り終えた後、そこを去って故郷に帰ったことについて「お帰りになる」が使われており、(10)は(9)と同じ内容を表す地の文であるが、ここでも<イエス>が故郷に帰ったことについてナル型敬語が使われている。(9)では「お帰りになった」の形態で文を終えており、(10)では「お帰りになったが」のように敍述を一旦止めて、これを後の文に繋げているという点から前後2文の間に休止が認められ、これによって文全体に荘重な雰囲気が感じられる。(11)は<イエス>が「聖霊に満ちて」ヨルダン川から帰ったことについてナル型敬語が使われたもので、「お帰りになった」のように文を終えており、後続文に「そして」のような接続詞が使われているといった点から、前後2文の間に休止が生じ、結果的に前の文に荘重さが表出されている。従って、(9)(10)(11)では荘重さや改まり度といった話体的要因がナル型敬語の使用に関与していると解される。

次に「帰られる」が使用された例を検討しよう。

(12) **イエス**が家に帰られると、群衆がまた集まって来て、一同は食事をする暇もないほどであった。

교보문고 KYOBO Book Centre

（マルコによる福音書 / 3章 20節）

(12)は<イエス>が家に帰ったことについてレル型敬語が「帰られると」のように既定条件を表す条件節の形態で使われているが、後続文との連結関係が継起的な動作として把握されており、このような前後2文間に表れる動作の連続性が敬語使用に関与したものと解される。即ち、改まり度が低いといった話体的要因が敬語使用に関与し、レル型敬語が使用されたものと理解される。勿論、移動の到達点に注目すれば、(9)(10)の「故郷」のように規模が大きく、抽象度の高いものについてはナル型敬語を、これに対し、(12)の「家」のように到達点が特定化され、具体的なものについてはレル型敬語を区別して適用したという解釈も成り立つ。このような観点から見れば、(9)の「故郷」、(10)の「家」は尊敬語形式の選択にあたって関与的な成分と見なされる。

(13) イエスは"霊"の力に満ちてガリラヤに帰られた。その評判が周りの地方一帯に広まった。

（ルカによる福音書 / 4章 14節）

(13)は<イエス>が「霊の力に満ちて」ガリラヤに帰ったことについてレル型敬語が「帰られた」のように文末終止で使われたもので、後続文に接続詞が明示的に使われていないが、前後の文脈上、前後2文が継起的な動作で連結されていることが分かる。ところで、(13)は先に検討した(11)と同様に<イエス>が敬意主体になっており、叙述内容もほぼ同じであるにもかかわらず、(11)ではナル型敬語が、(13)ではレル型敬語が使用されている。文中の移動に関する成分に注目すると、(11)では「イエスは～、[ヨルダン川から]お帰りになった」のように移動の起点が、(13)では「イエスは～[ガリラヤに]帰られた」のように移動の到達点が明示されているという違いがある。ところが、(11)の「聖霊に満ちて」や(13)の「霊の力に満ちて」のような修飾成分においては、実質的な意味の差は認められない。両者は移動を表す成分においては起点であるか到達点であるかという違いはあるが、敬意主体や移動の状況を表す修飾成分、また、文の叙述内容においては相

교보문고 KYOBO Book Centre

違点が見当たらない。それでは、果して如何なる理由で(11)では「お帰りになる」が、(13)では「帰られる」が使い分けられているのだろうか。ここで敬意主体に再び注目すると、「お帰りになった」が使われた(11)は、それ以前の<人間イエス>とは違い、<イエス>を神の息子と見なして、<神的イエス>として描写している文と理解される。これに対して「帰られた」が使われた(13)は、既に神の息子として悪魔から試練を受けているという点から、<人間イエス>から<神的イエス>への飛躍的な変化は表出されていない文と解される。言い換えれば、<イエス>を<神的イエス>として描写しているか、若しくは<神的イエス>を積極的に表出していないという敬意主体に関する把握の仕方の違いに差がある。このような敬意主体に関する把握の仕方の違いと尊敬語形式の選択の間の相関関係を(11)(13)に適用しなければ、同一福音書で敬意主体も同一、敍述内容もほぼ同じでありながら、尊敬語形式を異にする理由について意味ある解答を得ることはできない。日本語聖書(新共同訳)の4福音書の翻訳段階において、このような敬語主体に対する把握の仕方における違いを果して敬語形式に等差的に適用したであろうかという反論もあり得るだろうし、また、剰余的な複数の尊敬語形式が可能な動詞においては、そのどちらの形式を選択したとしても敬意主体を高める上では何ら支障がないという点から、翻訳者の意図を離れて著しく拡大解釈をしているのではないかという指摘もあり得ようが、我々の関心は翻訳段階において仮に無意識的な選択が成されたとしても、－　本稿では複数の尊敬語形式が成立する場合、日本語聖書(新共同訳)の翻訳段階で高度に意図された(選択的)運用が成されたと判断しているが　－　そのような翻訳過程を通じて提示された結果物を言語資料として吟味するところにある。従って、形態が異なれば意味が異なるという一般的な常識に基づき、ナル型敬語が使用された(11)とレル型敬語が使用された(13)との間には以上敍述したように敬意主体に対する把握の仕方の違い、更には荘重さという話体的な違いが認められるという立場を堅持する。

以上、検討した「お帰りになる」と「帰られる」の使用上の基準をその関与の仕方から観察すると次の通りである。(9)[マタイによる福音書]と(10)[マルコによる福音書]では<人間イエス>という敬意主体の特性、地の文という文体的特徴、改まり度が高いという話体的要因が、また、(11)[ルカによる福音書]では

교보문고 KYOBO Book Centre

<神的イエス>という敬意主体の特性、地の文という文体的特徴、改まり度が高いという話体的要因が認められ、これらの使用上の基準がナル型敬語を選択する上で関与している。「お帰りになる」が使われた文で話体的要因がどのように関与しているかを観察すると、(9)の[マタイによる福音書]では「お帰りになった」の形態で文を終えており、(10)の[マルコによる福音書]では「お帰りになったが」のように敍述を一旦中止して、これを後の文に連結しているといった点から、前後2文の間に休止が認められ、これによって文全体に荘重な雰囲気が感じられる。(11)の[ルカによる福音書]は<イエス>が「聖霊に満ちて」ヨルダン川から帰ったことについてナル型敬語が使われたもので、「お帰りになった」のように文を終えており、後続文に「そして」のような接続詞が使われているといった点から前後2文の間に休止が生じ、結果的に前の文に荘重さが表出されている。(12)の[マルコによる福音書]では<人間イエス>という行為主体の特性、地の文という文体的特徴、又、「帰られると」のように条件節に使用されることによって改まり度が低くなるという話体的要因が使用上の基準として作用してレル型敬語が使用されたのである。(11)の[ルカによる福音書]では<人間イエス>という行為主体の特性、地の文といった文体的特徴、それに「お帰りになった。そして、」のように文末終止に使用されることによって文脈上、前後2文が継起的な動作で連結され、改まり度が低くなるといった話体的要因が使用上の基準として作用してレル型敬語が使用されたのである。ところで、先に検討したように[ルカによる福音書]では、敬意主体も<イエス>のように同一で敍述内容もほぼ同じであるが、(11)ではナル型敬語が、(13)ではレル型敬語が使用されている。これについて本稿では<イエス>を<神的イエス>として描写しているか、若しくは<神的イエス>を積極的に表出していないという敬語主体に関する把握の仕方の違いに差があるといった点を指摘し、このような把握の仕方の違いと尊敬語形式の選択の間には相関関係があり、それと共に(11)と(13)では改まり度の違いといった話体的要因も認められるという立場を取る。

一方、移動の到達点に注目すると、(9)(10)の「故郷」のように規模が大きく、抽象度の高いものに対してはナル型敬語を、これに対して(12)の「家」のように到達点が特定化されて具体的なものに対してはレル型敬語を区別して適用したと

교보문고 KYOBO Book Centre

いう解釈も成り立つ。このような観点から見ると、(9)の「故郷」や(10)の「家」は尊敬語形式を選択するに当たって関与的な成分と見なされる。(11)[ルカによる福音書]の「イエスは~、[ヨルダン川から]お帰りになった」のように移動の起点が、(13)[ルカによる福音書]の「イエスは~[ガリラヤに]帰られた」のように移動の到達点が明示されている場合があるが、これは尊敬語形式の選択に当たって非関与的である。又、(11)[ルカによる福音書]の「聖霊に満ちて」や、(13)[ルカによる福音書]の「霊の力に満ちて」のように移動の状況を表す修飾成分が使われた場合があるが、これもやはりナル型敬語とレル型敬語の選択においては非関与的である。

V. おわりに

以上、日本聖書協会刊行による新約聖書(新共同訳)の4福音書を言語資料として、ナル型敬語とレル型敬語が混用されている例の中から、「お出かけになる・出かけられる」「お登りになる・登られる」「お帰りになる・帰られる」を対象として、これら尊敬語形式の使用実態を具体的に検討することにより、ナル型敬語とレル型敬語の選択に関わる使用上の基準について再度吟味した。その結果、該当の尊敬語形式を決定する上で直接関わる関与的な成分と、使用上の基準と見なされない非関与的な成分とを区別した。

本稿で考察した内容をまとめると以下の通りである。

[1]「出かける」の尊敬語形式には「お出かけになる」と「出かけられる」があるが、両者の使用上の基準をその関与の仕方から観察すると次の通りである。[マタイによる福音書](1)と[マルコによる福音書](2)では<神的イエス>と見なす<イエス>の行為に対して「お出かけになる」が使用されているが、両福音書でナル型敬語を選択するのに関与する要因には多少の違いがある。両福音書は<神的イエス>という敬意主体の特性、個別的かつ具体的な事件という行為内容のカテゴリー的特徴、地の文という文体的特徴において共通点が認められるが、[マタイによる福音書](1)

교보문고 KYOBO Book Centre

では改まり度の違いよりは<イエス>を<神的イエス>として表現するための敬意主体の把握の仕方に重点が置かれているのに反して、[マルコによる福音書](2)では話体的要因が該当の尊敬語形式の選択に直接的に関与している。また、[ルカによる福音書](3)では<人間イエス>という敬意主体の特性、個別的かつ具体的な事件という行為内容のカテゴリー的特徴、それに地の文という文体的特徴が使用上の基準として作用している。一方、(1)では「イエスが[そこから]お出かけになると」のように動作の起点を表す成分が、(2)では「イエスは[~の村に]お出かけになった」のように動作の到達点を表す成分が明示されているが、これらの成分は尊敬語形式を選択するにあたり直接関与していない。

[2]「登られる」の尊敬語形式には「お登りになる」と「登られる」があるが、両者の使用上の基準をその関与の仕方から観察すると次の通りである。[マタイによる福音書](4)では<イエス>を<神>と同格に見なしており、<神的イエス>という行為主体の特性、地の文という文体的特徴、それに荘重さという話体的要因が使用上の基準として関与し、<イエス>の行為に対してナル型「お登りになる」が使用されている。これに対し、[マタイによる福音書](5)(6)[マルコによる福音書](7)[ルカによる福音書](8)では<人間イエス>という行為主体の特性、当該行為が個別的かつ具体的な事件という行為内容のカテゴリー的特徴、それに話体的要因が使用上の基準として関与して、<イエス>の行為に対してレル型敬語「登られる」が使用されている。一方、(4)の「イエスは~[山に]お登りになった」と、(5)(6)(7)の「イエスは~、[山に]登られた」では「山に」のように移動の場所(到達点)を表す成分が明示されているが、前者ではナル型敬語が、後者ではレル型敬語が使用されているという点から、これらの成分は使用上の基準において非関与的であると言えよう。また、(4)の「イエスは[祈るために]ひとり山にお登りになった」と、(8)の「イエスは、~[祈るために]山に登られた」では「祈るために」という動作の目的を表す成分が使われているが、これも尊敬語形式の使用上の基準において非関与的なものと見なされる。

[3]「帰られる」の尊敬語形式には「お帰りになる」と「帰られる」があるが、両者の使用上の基準をその関与の仕方から観察すると次の通りである。[マタイによる福音書](9)と[マルコによる福音書](10)では<人間イエス>という敬意主体の特性、地の文という文体的特徴、改まり度が高いといった話体的要因が、また、[ルカによる福音書](11)では<神的イエス>という敬意主体の特性、地の文という文体的特徴、改まり度が高いといった話体的要因が認められ、これら使用上の基準がナル型敬語を選択する上で直接関与している。[マルコによる福音書](12)では<人間イエ

교보문고 KYOBO Book Centre

ス>という行為主体の特性、地の文という文体的特徴、それに話体的要因が使用上の基準として作用してレル型敬語が使用されている。ところが[ルカによる福音書]では敬意主体も<イエス>のように同一であり敍述内容もほぼ同じであるが、(11)ではナル型敬語が、(13)ではレル型敬語が使用されている。これに対して本稿では敬意主体に関する把握の仕方の違いと尊敬語形式の選択の間には相関関係があるという点を指摘し、併せて(11)と(13)では改まり度の違いといった話体的要因も認められるという立場を取る。一方、移動の到達点に注目すると、(9)(10)の「故郷」のように規模が大きくて抽象度の高いものに対してはナル型敬語を、これに対して(12)の「家」のように到達点が特定化された具体的なものに対してはレル型敬語を区別して適用したという解釈も成り立つ。このような観点から見ると、(9)の「故郷」と(10)の「家」は尊敬語形式を選択するにあたって関与的な成分と見なされる。[ルカによる福音書](11)の「イエスは~、[ヨルダン川から]お帰りになった」のように移動の起点が、[ルカによる福音書](13)の「イエスは~[ガリラヤに]帰られた」のように移動の到達点が明示されている場合があるが、これは尊敬語形式の選択に直接関与していない。また[ルカによる福音書](11)の「聖霊に満ちて」や[ルカによる福音書](13)の「霊の力に満ちて」のように移動の状況を表す修飾成分が使われた場合があるが、これもやはりナル型敬語とレル型敬語の選択においては非関与的である。

以上のように、1)<神的イエス>であるか<人間イエス>であるかという敬意主体の区別、2)個別的かつ具体的な事件であるか、若しくは包括的かつ抽象度の高い事項であるかという敬意内容のカテゴリー的な違い、3)地の文であるか対話文であるかという文体的な違い、荘重さ(改まり度)といった話体的要因は、ナル型敬語とレル型敬語がともに可能な動詞に限ると、ある特定形式を選択する上で直接的に関わるという点から使用上の基準において関与的成分として位置付けられる。しかし、これらの成分は個別的、多重的、相互複合的に作用しており、その関与の仕方は必ずしも等価的または均等ではない。

これに対し、(1)の「イエスが[そこから]お出かけになると」、(11)の「イエスは~、[ヨルダン川から]お帰りになった」のように移動の起点を表す成分や、(2)の「イエスは[~の村に]お出かけになった」、(4)の「イエスは~[山に]お登りになった」、(5)(6)(7)(8)の「イエスは~、[山に]登られた」、(13)の「イエスは~[ガリラヤに]帰られた」のように移動の場所(到達点)を表すものは、該当成分がたとえ文中

교보문고 KYOBO Book Centre

に明示されていたとしても、ある特定の尊敬語形式を選択するにあたって直接は関与していない。しかし、(9)(10)の「故郷」のように規模が大きく抽象度の高い事項を表し、またはそのような行為内容のカテゴリー的な違いが、(12)の「家」のように到達点が特定化され具体的な事件と対比される場合には、該当の尊敬語形式を選択するにあたって関与的な成分として機能する。また、(4)の「イエスは[祈るために]ひとり山にお登りになった」や、(8)の「イエスは[祈るために]山に登られた」のように動作の目的を表すものも、該当の尊敬語形式の使用上の基準において関わっていないといった点から非関与的な成分と見なされる。同様に、(11)の「聖霊に満ちて」や(13)の「霊の力に満ちて」のように移動の状況を表す修飾成分もナル型敬語とレル型敬語の選択においては非関与的である。

以上の考察内容は、李成圭(2011a)で「お帰しになる・帰される」「お教えになる・教えられる」「お与えになる・与えられる」「お命じになる・命じられる」「お造りになる・造られる」「お示しになる・示される」を対象に行った使用上の基準と、李成圭(2011b)で「お受けになる・受けられる」「お乗りになる・乗られる」「お座りになる・座られる」を対象に行った使用上の基準が有効であることを立証する。

참고문헌

李成圭・閔丙燦(1999)『現代日本語敬語の研究』不二文化社, pp.70-78.

____________(2006)『현대일본어 경어의 제문제 - 日本語 実用文法의 展開IX -』不二文化, pp.40-63.

李成圭(2010a)「「おっしゃる」와 「言われる」의 사용상의 기준 - 신약성서(신공동역)의 4복음서를 대상으로 하여 -」『日本学報』82 韓国日本学会, pp.99-110.

______(2010b)「「おいでになる」와 「行かれる・来られる」의 사용상의 기준 - 신약성서(신공동역)의 4복음서를 대상으로 하여 -」『日本学報』83 韓国日本学会, pp.113-124.

______(2010c)「잉여적 선택성에 기초한 「なさる」와 「される」의 사용상의 기준 - 신약성서(신공동역)의 4복음서를 대상으로 하여 -」『日本学報』84 韓国日本学会, pp.209-225.

______(2011a)「ナル형 경어와 レル형 경어의 사용상의 기준 - 복수의 존경어 형식이 혼용되고 있는 예를 중심으로 -」『日本学報』86 韓国日本学会, pp.121-141.

______(2011b)「ナル형 경어와 レル형 경어의 사용실태 - 화체적(話体的) 요인을 중심

교보문고 KYOBO Book Centre

으로 하여 -」『日本学報』87 韓国日本学会.
菊地康人(1996)『敬語再入門』丸善(丸善ライブラリー)、pp.24-35.
________(1997)『敬語』角川書店(再刊:講談社学術文庫、1997)、pp.144-186.
国語審議会(1952)「これからの敬語」(建議).
国語審議会(2000)「現代社会における敬意表現」(答申).
日本聖書協会(1987)『聖書』(新共同訳)、pp.(新)1-(新)212.
文化審議会(2007)『敬語の指針』(答申)、pp.14-26.
聖書本文検索(新共同訳) 日本聖書協会 <http://www.bible.or.jp/vers_search/vers_search.cgi>.

❖ 투고일 : 2011.06.30
❖ 심사일 : 2011.07.26
❖ 심사완료일 : 2011.07.28

교보문고 KYOBO Book Centre